

「植物標本を作る(2)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

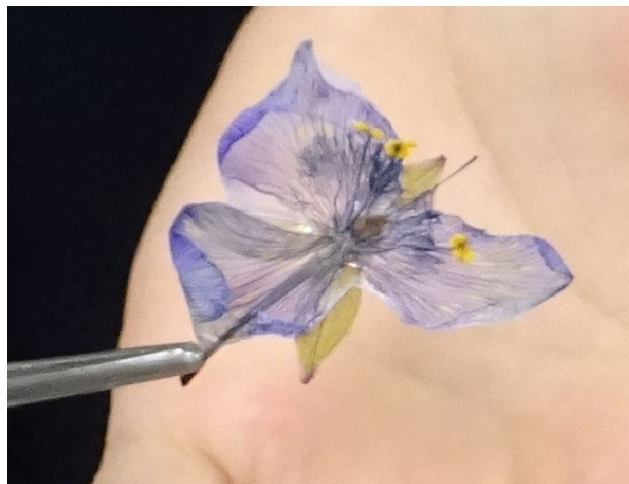
私は高校生の時に植物の分類に興味を持ち、腊葉標本(さくようひょうほん)を盛んに作った時期がある。野冊を持って多摩丘陵あたりを歩き回り、橋本秀一先生や、本田正次先生に面会し、同定をお願いしたこともある。子どもたちと腊葉標本を作っていて、その頃夢中になったことを、なつかしく思い出した。



カラスノエンドウのように、水分が比較的少ない草本は、紙に挟んで適当な重物を載せて一週間も置けば、ほぼ標本として完成している。



しかしツツジの花のように、水気が多くて柔らかいものは、一回紙に挟んだだけでは水分が完全に抜けず、そのままではカビや悪臭が発生することもある。この場合、新しい紙に挟み直すか、紙と紙の間に吸湿用の別の紙(古新聞が良い)を挟む必要がある。



これは「ムラサキツユクサ」の標本。この花は特に水分が多く、紙に挟んで乾いてくると、花卉が透き通って見える。別の紙に挟み直すと同時に、ピンセットで形を整える作業をすると良い。



「ヤエムグラ」の葉も水分が多い。しかし標本にすると8枚の葉が、茎を囲むように「輪生」している特徴がよくわかって面白い。



20分ほどの作業で、ほとんどの子どもは、新しい紙に挟みかえる作業を終えた。もともと標本数が多かった子どもは、少ない子どもに分けてあげる姿が嬉しかった。植物が教えた「優しさ」の一つだろう。